

平成24年の新年を迎えた。昨年は日本にとって大きな苦難の年になりました。1000年に一度といわれるような大きな地震と津波が東北地方を襲いました。加えて大きな原発事故がひきおこされました。この天災で亡くなられた約1万6000人の人々に心からなる追悼の誠をささげますと共に被災を受けられた多くの人々、東北地方の学友会員の先生方に心より見舞いを申し上げたいと思います。

この大きな災難を通して日本人がいかに素晴らしい国民であるかということを外国の人々に印象づけることが出来ます。

「グローバル」な活躍を

理事長 岸本忠三

年頭あいさつ



第231号

公益社団法人
医学振興
銀杏会

06(6879)3501

(編集同人)

川越裕也 荻原俊男
門田守人 米田正太郎
杉本木村 武田雅俊
杉本木村 尚長

先日ピアノの河村尚子、バイオリンの庄司紗矢香が外国の一流のオーケストラと共に演じる音楽会に出席しました。彼女らの技術が超一流であることは言うまでもありませんが、その堂々たる態度に感心しました。ヨーロッパで暮らす段々とひ弱になっていかない心配です。我が阪大の卒業生の半分位が外国で堂々と競うというようになつて欲しいものです。

「グローバル」に活躍されることが心配です。我が阪大の卒業生はノーベル賞をのがしました。しかし毎年候補者の中に学友会員の名前があつてほしいものだと思います。私が学友会会員の多くが日本に出て行かなくなつました。段々とひ弱になっていかない心配です。我が阪大の卒業生の半分位が外国で堂々と競うというようになつて欲しいものです。

今年は残念なことにもう一歩というところで阪大医学部はノーベル賞をのがしました。しかし毎年候補者の中に学友会員の名前があつてほしいものだと思います。

我が学友会会員の多くが日本に出て行かなくなつました。段々とひ弱になっていかない心配です。我が阪大の卒業生の半分位が外国で堂々と競うというようになつて欲しいものです。

「グローバル」に活躍されることを期待して新年の挨拶といたします。

画題 Souvenir 信州



君子は山を愛し、知者は海を愛すと言葉がありますが、私は君子ではありませんし、知者でもありません。それでも山が好きですし、海も好きです。正確に言うと山や海を描くのが好きです。毎年信州にスケッチに行っていたのです

が、この三年は行けなくなりました。けれども、心の中に信州の風景が確りと焼き付いています。そのイメージで描いたのがこの絵です。ですから「Souvenir 信州」と題しました。

岡川和弘（昭31）

第23回シンポジウム

地域医療の課題とその対策

平成23年度の医学振興銀杏会主催のシンポジウムは、11月17日(木)銀杏会館の阪急・三和ホールにて開催された。大阪大学医学部附属病院の各関連病院代表といった方が多数参加された。

定刻に開会。早石雅宥副理

事長(昭42)の司会で岸本忠

三理事長(昭39)が開会の辞

を述べた。次に、米田悦啓研

究科長(昭56)が挨拶、福澤正洋病院長(昭50)が阪大病

院の現状を報告した。続いて、この1年間に医学部に就任した3人の新教授、医療情報学松村泰志先生(昭60)、神経内科学望月秀樹先生(神経内科、呼吸器・免疫アレルギー内科学熊ノ郷淳先生(平3)から挨拶があった。

今回の、現在最も関心の深い「大阪における救急医療の課題とその対策」をテーマに、荻原俊男理事長(昭43)、森ノ宮医療大学(学長)をコーディネーターとして、吉岡敏治先生(昭46)、大阪府立急性期・総合医療センター(院長)ならびに嶋津岳士先生(昭55)、大阪大学医学部救急医学教授によるパネルディ

スカッションを行つた。引き続き、活発な質疑応答が行われた。



救急医療が直面している課題として嶋津教授から、初期・

二次救急を担う施設が減少し

ておりそのしわ寄せが三次施

設に及んでいるために本来担

当すべき重症患者の受け入れ

が困難になつてきている、ま

た救急担当医の絶対数が減少

しており、平均年齢が上昇し

ている、との指摘がなされ

た。救急体制の問題に対しても、嶋津教授から米国型のEMS systemをそのまま日本に導入するには多くの問題があ



あることが示された。金森課長からは地域に根差した救急体制の構築が重要であり、行政として現在進めている産科救急および精神科救急についての説明がなされた。吉岡院長からはスタートしたばかりの携帯端末を利用した効率的救急搬送システムの研究についての紹介があった。更に吉岡院長から救急・周産期医の専門医養成を目的とした大阪府医療人キャリアセンターの紹介があった。最後に杉本壽星ヶ丘厚生年金病院院長

有益であるから、卒後1年程度救急医療に従事することを義務化するようなシステムを作ることを考えるべきであるとの提言がなされた。

パネルディスカッションの要旨は、本年度会費を納入済みの方に本号と同封している「学友会会誌」に掲載しているのでご高覧下さい。

早石雅宥
(昭42)



平成23年度 秋 叙勲と受賞

瑞宝重光章 青野敏博先生（昭35）	大阪科学賞	山下俊英先生（平2）
瑞宝中綬章 野崎光洋先生（生化学）	日本医師会最高優功賞	大城 孟先生（昭35）
瑞宝小綬章 小山博記先生（昭35）	日本医師会最高優功賞	宮城信雄先生（昭47）
瑞宝双光章 宮戸 元先生（昭32）	日本医師会優功賞	岸本忠三先生（昭39）
藍綬褒賞 三上裕司先生（昭49）	吹田市長賞	審良静男先生（昭52）
従四位 内藤 健先生（昭15） (平成23年8月13日ご逝去)		

寄附御礼

当会の公益目的事業へご寄附をいただき、誠に有難うございました。

平成23年9月14日

今川準蔵先生（昭24専）より、100万円をご寄附頂きました。

平成23年9月16日

会員の先生より匿名にて、40万円をご寄附頂きました。

平成23年11月24日

会員の先生より匿名にて、金一封をご寄附頂きました。

ご寄附方法については最終面をご覧ください。

平成23年度 岸本基金奨学助成金奨学生採択者について

厳正なる審査の結果、平成23年度岸本基金奨学助成金奨学生採択者は下記の13名に決定いたしました。平成23年度の岸本基金奨学助成金授与式は、9月26日（月）大阪大学銀杏会館A会議室にて、執り行われました。



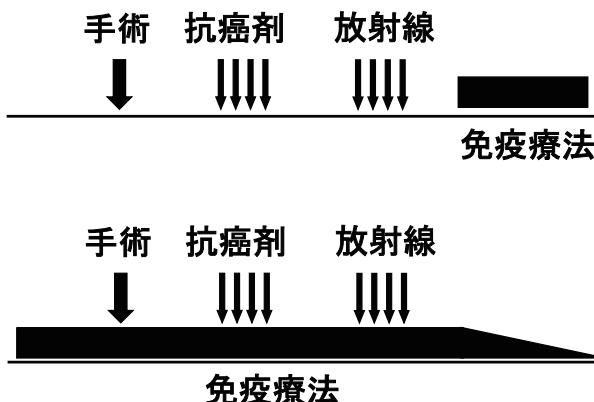
採択者13名

1年次	小野 晃裕	服部 真也
2年次	塚原 理恵	
3年次	作田友香子	原田 昭和
	矢田 知大	綿谷 朋大
4年次	梅田 大介	名川 恵太
	西山 一聖	
5年次	松本 遼太	
6年次	桐生 幸歩	神徳 隆之

癌免疫療法

1970年代、免疫療法によって癌を治せるのではないかという氣運が高まり、癌を異物化して免疫原性を高めようとする研究や、BCG—CWS、N—CWSなどの菌体成分を投与する方法が盛んに研究され、丸山ワクチン論争もあり、今にも免疫療法で癌を撲滅せざるのではないかと、ワクワクしていた当時を思い出されます。その後、免疫療法は、前評判のよつた臨床効果が出ず、失望が広がりはじめ、次第に無視され、忘れ去られ、その後は、免疫療法は胡散臭いものとして、余命を保つてきました。この失敗の1つの原因是、MHCクラスI・II分子の役割や、自然免疫・獲得免疫の知見が十分な

癌の治療戦略



分でないまま、科学的でない免疫療法が行なわれたことであり、もう1つの原因是、免疫療法は、抗腫瘍剤療法をサポートするアジュバント療法との位置づけに固守し、このコンセプトにそつて実施したため、抗癌剤による強い免疫抑制状態の中での免疫療法を行なうといったミスをおかしたためだと思います。その後、近年になり、科学に基づいた癌免

り、基礎免疫学の発展に伴い、癌免疫におけるMHCクラスI・IIの役割が明らかになり、自然免疫・獲得免疫の概念が確立され、本年度のノーベル医学・生理学賞の樹状細胞の発見、Toll-Like Receptor の発見（会員の審良静男先生が多大なる貢献）、そして癌抗原ペプチドも設計できるようになり、科学に基づいた癌免

疫療法を行ひる時代を迎えた。BCG-CWSも、本学友会会員・林昭先生の努力によつて復活され、その臨床効果も実証されてきました。癌抗原・パルス樹状細胞療法や癌抗原ペプチド免疫療法も成果を上げてきております。癌の免疫療法は、明らかに臨床効果があり、Proof of Concept（概念の科学的実証）もされ次第、速やかに、静止期法、放射線療法の3大療法につづく第4の治療法と期待されるようになり、その臨床効果が確かなものにならうとしておりますが、まだ、すべての既存の治療法がなくなつてから、4番目に行う治療法であるという感をまぬがれません。しかし、近い将来、癌が発見され、次第、速やかに、静止期

両者の適切な
り、今までの
予想を超えた
うるようにな
考えています。

疫療法を行なうる時代を迎えた。BCG—CWSも、本学友会会員・林昭先生の努力によつて復活され、その臨床効果も実証されてきました。癌抗原パルス樹状細胞療法や癌抗原ペプチド免疫療法も成果を上げてきています。癌の免疫療法は、明らかに臨床効果があり、Proof of Concept（概念の科学的実証）も集積されてきております。しかも、免疫療法では、重篤な副作用が出ないことがはつきりしてきました。さらに、つい最近までは、化学療法と免疫療法は全く相容れず、敵対関係にあるというイメージがありました。それは間違いであることがわかつてきました。免疫能が十分に残った状態で、免疫療法を、化学療法より先行したり、化学療法と同時におこなうことにより、相乗、相加効果が出ることがわかつてきました（当然といえば、当然ですが）。今後は、両者の適切な組み合わせにより、今まで経験しなかった、予想を超えた臨床効果を出しうるようになつてくるものと、

免疫療法は、手術、化学療法、放射線療法の3大療法につづく第4の治療法と期待され、ますます臨床効果が確かなものになろうとしておりますが、まだ、すべての既存の治療法がなくなつてから、4番目に行なう治療法であるという感をまぬがれません。しかし、近い将来、癌が発見され次第、速やかに、静止期癌幹細胞を死滅させうるポテンシャルをもつ（抗がん剤や放射線は、このポテンシャルをもたない）免疫療法を開発し、十分に免疫能を上げてから、その後、必要に応じて、3大療法といわれる治療を行ない、癌が完治したと確信されるまで免疫療法を継続するような時代が来ると考えております。世界の大手製薬企業も、癌免疫療法に本格的に乗り出し、大変な競争状態になつてきました。おそらく、近い将来、癌免疫療法は、癌の根本的治療法になるものと思つております。

提

言

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は約1万6千人近くの尊命を一瞬にして奪い、しかも原子力発電所の炉心溶融、爆発という事態を併発した歴史的災害であった。阪神淡路大震災の際に比べ、DMATは当日の夕方から出発、自衛隊も速やかに行動するなど組織立った支援は格段に進歩し



…その132

分娩は陣痛発来すれば動かない。東北大学病院でも震災後数日間手術は帝王切開だけであり、分娩室は使用不可能となった産院からの分娩が加わり混雜したといつ。その際、分娩セット、滅菌手袋などのディスポ製品の在庫がなくな

れてきた。その後も学会などで何度も学習会などを行っているが、ベルリンは一度も訪れたことが無かった。20年前のベルリンの壁崩壊以降、訪問の機会を探していたが、来てみて驚いた。他のドイツの都市で感じられたのは、全く異なる雰囲気をベルリンは持っている。人々は、ソーセージの代わりに魚料理を好み、すじバーの記念にヨーロッパに旅行した。ベルリンとパリの1週間の短い旅だが、印象深いものだった。中高生のころから世界史に興味があるので、大學入学以降、ヨーロッパには何度も訪れた。ドイツは、食べ物が合うためか特によく来た。新婚旅行にもフランクフルト、ミュンヘンに家内をつ

たように感じた。本学高度救命センターの医師も出動・活動したが、残念ながら津波による溺死者が多く救命症例は少なかつたと聞いている。

災害直後から通常通り患者と医療を続けねばならなかつた部門の一つに産科があつた。分娩は陣痛発来すれば動かせない。東北大学病院でも震災

品や輸送ルートに関する情報が学会や周産期医療関係者のメーリングリストに載って増え、私もまた震災後数日100件以上のメールが舞い込み、一部の先生達が

本人が持っていると思うドイツの厳格さ、几帳面さ、重厚さなどはベルリンでは感じられない。滞在していたホテルで、退役軍人のつどいの会がひらかれており、威風堂々

として老将軍たちに出会えたりの印象も大きい変わった。しかし、これまでの間で、都市や国の変化は、そこに開けてくれた。シャルルドゴー

ル空港では、チェックインカウンターの場所を聞くとわざわざ案内してくれた。小さな

ホテル、レストランでもトラ

ベルーズチェックが使えた。

ベルリンではカジノでもホテ

ルでも断られた。通貨はユーロに統一され、EUがまるで

一つの国のように形態をとるよ

うなった今、パリは実質上EU

の首都として、訪れる外国人

に対する責任を自覚し、ゆ

くとも拙い英語で意思疎通を

図る努力をしてくれた。閉店

のようである。ただ、道のき

たな（おもに吸殻）は旧態

が減少し、業者も同様に必要がある。

災害時に必要な物品、薬剤

は科によって全く異なる。在

庫増が無理なら診療科各自で

管理され、停電しコンピュ

ターとグレンが壊れたら半

壊でもどこに何があるかわ

らず物語搬出ができなかつた。

被災地からの物品不足情報は

メールで断続的に発信され、

たちまち増幅して、関係者を

焦燥感に陥れ無秩序な援助要

請になった。業界団体は厚生

労働省からの支援要請があれ

ば動く、とのことだが、厚生

労働省に各科特有の問題の緊

急対応をお願いするのは無理

た。各地の被害状況、不足物

渴問題が生じた。短期間での

定なども含めて全国ネットで

考えておくほうがよい。次は

大阪かもしれない。備えあれ

ば憂いなし。

備えあれば

薬品・ディスパ製品の枯渇、ネット情報の氾濫は前回阪神淡路大震災では見られなかつた現象だと思つ。

病院では経営の効率化のた

め薬剤やディスパ製品の在庫

が学会や周産期医療関係者のメーリングリストに載って増殖し、私のもとに震災後数日100件以上のメールが舞い込み、一部の先生達が

が舞い込み、一日100件以上のメールが舞い込み、一部の先生達が

が舞い込み、一日1

紹
診
療
科
介

放射線診断科

大阪大学放射線統合医学講座は現在、放射線医学・放射線治療科学・核医学の3教室からなっており、昨年4月より私が放射線医学の教授に就任しました。当教室は学内構成員30名余、同門会組織とし40の関連病院に常勤医を派遣しています約300名の会員を擁し、大阪府下と阪神地域にある約40の関連病院に常勤医を派遣しています。放射線医学教室は放射線診断科として、主に画像診断およびインターべンショナルラジオロジー(IVR)の業務を担っています。